

きべりはむし

第18巻 第2号

目 次

兵庫県のグンバイムシ (2)	高橋 寿郎	27
尼崎西南部の昆虫 (その3)	新家 勝	32
シロヘリクチブトカメムシを西宮市内で採集	新家 勝	35
阪神間でのカミキリ2種の採集記録	新家 勝	36
ホソオチョウ・神戸市東灘区で採集される	三宅 隆三	36
兵庫県産珍稀な3種のクビボソハムシの記録	高橋 寿郎	37
キイオオトラフコガネ兵庫県に産す	高橋 寿郎	41
キベリハムシ西宮市にも生息	三宅 隆三	42
北ベトナム産のキベリハムシ	高橋 寿郎	43
オオツノトンボ神崎町で採集	森田 真澄	45
笠形山のシデムシ4種	森田 真澄	45
ニシキキンカメムシをめぐりて (其の二)	高橋 寿郎	46
県関係文献紹介		47
学会誌・同好会誌・連絡誌		49

兵庫昆虫同好会

1990年11月

兵庫県のグンバイムシ (2)

高橋 寿郎

10. *Stephanitis fasciicarina* Takeya, 1931 クスグンバイ

武谷 直氏が九州産 Akama (Chikuzen) ならびに Shimonoseki, Honshu 産をタイプに記載された種である。図もついている。宮本博士の原色図説もある(1965)。Lee により5令幼虫と♂交尾器の図説がある(1969)。原記載の時点で寄主植物としてタブノキ、クスノキを掲げられ宮本博士はさらにシロダモを加えクス科植物に寄生するとされている。

兵庫県下でも割合と採集出来る種である。

産地：洲本市三熊山 [友国, 1973]。三原郡福良 [友国, 1973]。神戸市烏原 (lex., 30-VIII-1972, lex., 19-IX-1972, lex., 18-X-1971, lex., 24-VII-1975, lex., 16-VII-1982, lex., 9-VII-1984, lex., 24-X-1985, lex., 11-IX-1985)。多可郡烏羽 (lex., 6-IX-1975)。養父郡関宮町 [Takeya, 1963]。

11. *Stephanitis nashi* Esaki et Takeya, 1931 ナシグンバイ

江崎悌三博士と武谷 直氏により新種記載された種である(1931)。江崎博士は本州、四国及び九州に最も多くナシ、サクラ等の葉裏に群棲し、その葉を枯死せしめる著名な害虫であると記されている(1950)。Lee は1~5令幼虫と♂交尾器を図説している(1969)。武谷氏は上記以外寄主植物としてアンズ、モモ、カイドウ、ボケ、ズミ、ヤマブキ、サンザシ等を掲げておられる(1951)。

県下での記録が思った程ない。もっと広く分布している種だと考えられる。

産地：神戸市烏原 (lex., 26-IV-1985)。Harima [Takeya, 1963]。小野市山田 (lex., 23-VI-1987)。氷上郡 [山本, 1954, 1958]。豊岡市九日市 [高橋, 1975]

12. *Stephanitis pyrioides* (Scott, 1874) ツツジグンバイ

G. Lewis の採集品に基いて Scott が *Tingis* 属の種として新種記載された種である (詳しいデータはついていない)。

Horváth は1905年 *Stephanitis azaleae* と改稱しているが之は承服出来ない。ツツジを害するものが *S. pyrioides* Scott なることは W. E. China に依頼 British Museum に存する Scott のタイ

ブと比較して貰って確かめたと江崎悌三、武谷 直両氏は述べておられる(1931)。

江崎悌三博士は図説をされ(1950)その中で“ツツジ、サツキ等の葉裏に群棲しその葉を黄化させる著名な害虫である。北海道、本州、四国及び九州に頗る普通である”とされている。宮本正一博士の原色図説もある(1965)。さらに Lee により1~5令幼虫及び♂交尾器の図説がある(1969)。

兵庫県下でも大変たくさん見られる種である。

産地：西宮市船坂(lex., 5-VI-1987)。神戸市烏原(lex., 20-VI-1982, lex.; 22-VII-1982, 5exs., 23-VII-1982, lex., 16-IX-1982, lex., 5-X-1982, lex., 24-X-1985, 3exs., 4-IX-1986, 2exs., 11-IX-1986)、逢山峡(lex., 11-VII-1987)。Harima Prov. [Takeya, 1951]。三木市口吉川町(lex., 14-VII-1986, 3exs., 4-IX-1986, 5exs., 3-X-1986)、笹原(2exs., 11-IX-1986, lex., 26-IX-1986)。小野市山田(4exs., 19-VI-1987, . lex., 23-VI-1987)。加東郡社町三草(lex., 17-V-1987, lex., 26-VI-1987)。龍野市神岡(lex., 21-VII-1988)。養父郡関宮町[R. Morimoto leg., Takeya, 1963]。

13. *Stephanitis swensoni* Drake, 1948 シキミグンバイ

本種は九州産で Drake が記載した種である(1948)。武谷氏は詳しい記載をされ(1953)、同氏が九州から記載した *S. shirozui* Takeya を本種のシノニムにされている。

宮本博士の原色図説があり(1965)、寄主植物としてシキミだけが知られているとのこと。Lee は5令幼虫と♂交尾器を図説している(1969)。

兵庫県下からは僅か1頭しか採集していない。恐らくこれは調査不十分からだと考えられる。

産地：神戸市六甲山(lex., 23-VI-1968)

14. *Stephanitis takeyai* Drake et Maa, 1953 トサカグンバイ

Stephanitis globulifera Matsumura なる学名を用いられて来た種は本種のシノニムとなる。

宮本博士(1965)、日浦氏(1977)の図説がある。分布も広い(本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、北米)。

武谷氏は多くの産地を記録されている(1963)と同時に寄生する樹木も多く記しておられる(シキミ、アオモジ、クロモジ、ケクロモジ、シロモジ、クスノキ、ダンコバイ、ホツツジ、アセビ、カキ、エゴノキ)。特にアセビ、ネジキに多いとされている。前胸背の囊状隆起は大きく頭部をおおう面白い格好である。

Lee は1~5令幼虫及び♂交尾器を図説している(1969)。

兵庫県下にも広く分布している種である。

産地：西宮市船坂 (lex., 26-V-1987)。神戸市六甲山 [Takeya, 1963], 烏原 (lex., 17-V-1979, lex., 9-VII-1984)、箕谷 (3exs., 4-X-1989)。美囊郡吉川町奥山 (2exs., 10-V-1986)。加東郡社町三草 (lex., 22-V-1989, lex., 1-VI-1989)。多可郡鳥羽 (lex., 5-VII-1975)。相生市三濃山 (6exs., 20-V-1973)。佐用郡 [井口, 1808]。養父郡関宮町 [Takeya, 1963]

15. *Galeatus spinifrons* (Fallén, 1807) キクグンバイ

割合独特な形をしているので同定に困難は無い。江崎博士 (1950)、宮本博士 (1965)、日浦氏 (1977) といづれにも図説されている。また Lee は 4, 5 令幼虫と♂交尾器を図説している (1969)。

本州、四国、九州、台湾、朝鮮、シベリア、ヨーロッパと広く分布している。ヨモギ、ヨメナ類に多いがキクを害することがあると。

県下の記録はそれ程知られていない。

産地：宝塚市武田尾 [日浦, 1977]。Prov. Harima [Takeya, 1951]。水上郡 [山本, 1954, 1958]。城崎郡日高町奈佐路 (3exs., 19-VI-1986)

16. *Cochlochila lewisi* (Scott, 1880) エグリグンバイ

Scott が日本産で *Leptodictya* 属の種として記載したものである (1880)。G. Lewis の採集品なので産地は書いてないが長崎か兵庫なのかも知れない。本種も割合独特の形態をしている。江崎博士 (1950。学名は *Cochlochila conchata* Matsumura となっている)、宮本博士 (1965。 *C. conchata* Mats. が本種のシノニムであるとされている) の図説がある。宮本博士によると山地の水際に生えたオタカラコウの葉裏に多いがフキにつくこともあるとのこと。Lee は 1, 4, 5 令幼虫と♂交尾器を図説している (1969)。

兵庫県下の記録が次のとおりある。

産地：Prov. Harima [Takeya, 1951]。水上郡 [山本, 1954, 1958]。

17. *Xnotingis hoytona* Drake, 1948 クチナガグンバイ

Drake は日本からの標本で産地を記さずに記載をしたが武谷氏は井口宗平氏の播磨産標本 (22・

IV・1909)を記録された(1951)。その後同氏は紀伊黒沢山及び四国伊予杉立から1頭ずつ記録された(1953。図も示された)。宮武氏も愛媛県黒滝を記録された(1953)。

分布は本州、九州となっているがどのような産出状況のグンバイムシか良くわからなかった。兵庫県下からの産地からすればそれ程すくないグンバイムシでないのかもしれない。

産地：神戸市烏原 (lex., 14-V-1981, lex., 25-VI-1983)、谷上 (lex., 20-IV-1981)、伊川谷前開 (lex., 13-V-1988, lex., 7-VI-1988)。Prov, Harima [Takeya, 1951]

〈参考文献〉

参考文献は大変多い。此処には筆者所有のもので本報文作製にあたり直接参考にしたもののみを掲げた。

足立輝一、1934。資料二三。昆虫界 2(10):439-440。

Drake, C., 1923. Some Tingitidae from Japan (Hemiptera). Ohio Journal of Science. 23:102-106

Drake, C., 1948. Some Tingitidae from China, Japan and India. Notes d'Entomologie chinoise 12:1-9。

江崎悌三、1931。蟲癭を形成するグンバイムシの一種に就いて。九州帝国大学農学部学芸雑誌 4:244-253。

江崎悌三、1950。日本昆虫図鑑(北隆館)

江崎悌三・武谷 直、1931。ナシグンバイの学名。むし 4(2):51-59, 3pls.

Esaki, T. and Takeya, C., 1933. A new Tingitid from Formosa (Hemiptera:Tingitidae). Mushi 6:1-3.

平嶋義宏監修・九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共同編集、1989。日本産昆虫総目録 I. (p.166-168)。

日浦 勇、1977。原色日本昆虫図鑑(下)。(保育社)

井口宗平、1908。兵庫県佐用郡産昆虫目録(承前)。昆虫世界 12(132):337。

石原 保、1971。動物系統分類学7(下B)。(中山書店)

Lee, C. E., 1969. Morphological and phylogenic studies on the larve and male genitalia of the East Asiatic Tingidae (Heteroptera). Jour. Fac. Agric. Kyushu Univ. 15(2):137-256.

宮本正一、1965。原色昆虫大図鑑, 第3巻。(北隆館)

宮武睦夫、1953。四国産グンバイムシ科数種。あげは (6):15。

Scott, J., 1874. On a collection of Hemiptera Heteroptera from Japan—Descriptions of various genera and species. *Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 4*:14:289-304, 360-365, 426-455.

Scott, J., 1880. On a collection of Hemiptera from Japan. *Trans. Ent. Soc. London*, 4:3 05-317.

高橋 匡, 1975. 豊岡高等学校昆虫標本目録 (第1, 2報). 兵庫県立豊岡高等学校生物教室刊.

高橋寿郎, 1974. 兵庫県の異翅亜目 (2). きべりはむし 3(1):1-2.

Takeya, C., 1930. On a little-known Tingitid, *Monanthia* (Baba), occurring in Japan (Hem. Heter). *Mushi* 3(2):67-72.

武谷 直, 1930. トサカグンバイの寄主植物. むし 3(2):72.

Takeya, C., 1931. Some Tingitidae of the Japanese Empire. *Mushi* 4:65-84, Tab, 7-9.

Takeya, C., 1932. Some Corean lace-bugs (Hemiptera, Tingitidae). *Mushi* 5:8-13. Tab. 1.

Takeya, C., 1933. New or Little-Known lace-bugs from Japan. Corean and Formosa (Hemiptera:Tingitidae). *Mushi* 6:32-38

Takeya, C., 1951. A Tentative List of the Tingidae of Japan and her adjacent territories (Hemiptera). *Kurume Univ. Jour. (Nat. Sci)*. 11(1):5-28.

Takeya, C., 1953. Notes on the Tingidae of Shikoku, Japan. (Hemiptera). *Trans. Shikoku Ent. Soc.* 3(7):167-176, pl. 6.

Takeya, C., 1963. Taxonomic Revision of the Tingidae of Japan, Korea, The Ryukyus and Formosa Part. I. (Hemiptera). *Mushi* 36(5):41-75.

Takeya, C., 1963. Taxonomic Revision of the Tingidae of Japan, Korea, The Ryukyus and Formosa Part. 2 (Hemiptera). *Mushi* 37(4):27-52.

Tomokuni, M., 1972. Japanese Species of the Genus *Acalypta* (Hemiptera:Tingidae). *Trans. Shikoku Ent. Soc.* 11(3):87-91.

友国雅章, 1973. 本四架橋ルートの島々の昆虫相. 本州四国連絡架橋に伴う周辺地域の自然環境保全のための調査報告書. 学術調査編 (動物部門), p.162.

友国雅章, 1978. グンバイムシの生活. *インセクタリウム* 15(3):4-8.

山本義丸, 1954. 兵庫県丹波地方の異翅類目録. *兵庫生物* 2(4/5):216-218.

山本義丸, 1958. 兵庫県氷上郡昆虫目録. 氷上の自然 第3集 p.116.

Uhler, P. R., 1896. Summary of the Hemiptera of Japan, presentend to the U. S. National Museum by Prof. Mitsukuri. *Proceedings of the U. S. National Museum* 19:255-297.

(V-1990).

尼崎西南部の昆虫（その3）

新 家 勝

V Odonata 蜻蛉目

当時、この地域でトンボ採りは、男の子たちに最も人気のある夏の遊びであった。トンボ採りをしない子は、いなかったといってもよく、池や田など水辺はトンボ採りの歓声が絶えなかった。こうした光景は、大阪平野のどこでも見られた筈である。そして、採っても採っても直ぐトンボが現われる様は、振り返えると正に夢のようである。数多い田、広大な湿地帯、随所にある池などが、採り尽せない程のトンボを育てていたのである。しかしながら、いくら固体数が多いと言っても、種類は平地性のものに限られるため、それ程多くはなかった。

1 Aeshunidae ヤンマ科

(1) *Aeschnophlebia longistigma* Selys アオヤンマ

VI. 30. 1946 1♀

後述のギンヤンマの次に多い種類であり、美しい青緑色にちなんで子供たちはタケヤンマと呼んでいた。水辺のアシやショウブなどの間をゆっくりと飛び回り、また庭木の間や軒先などにもよく現れて昆虫を捕食するが、巣上にいる小型のオニグモを捕えることが多かった。当時の図鑑ではアオトンボであった。

(2) *Aeschnophlebia anisoptera* Selys ネアカヨシヤンマ

VII. 11. 1946 1♂

VII. 23. 1946 1♀

前述のアオヤンマによく似ているが、非常に少なく、2頭の標本以外に2、3度捕まえたように思う。習性についての記憶は全くないが、取り損って中空に舞い上がったとき、翅端と基部の褐色の鮮かさが無念さを誘ったものである。当時の図鑑ではネアカヨシトンボであった。

(3) *Polycathagyna malanictela* Selys ヤブヤンマ

VII. 18. 1942 1♀

1頭採集し、標本を保存しているのみで他に目撃の記憶もない。生息する環境が異なるので、この地域には定住せず、偶然、飛来したものと思われる。

(4) *Anax nigrofasciatus nigrofaciatus* Oguma クロスジギンヤンマ

V. 13. 1950 1♂

VI. 15. 1945 1♀

毎年5、6月頃になると、池の上を徘徊するのが見られたが、固体数は少なかった。

(5) *Anaciaeschna martini* Selys マルタンヤンマ

VII. 29. 1947 1♀

多くはなかったが、池に産卵に来る雌を幾度も捕獲し、目撃した。雄は一度も目撃したことがなかった。

(6) *Anax parthenope julius* Brauer ギンヤンマ

極め付きの普通種で、もちろん個体数も並外れて多く、ヤンマといえばギンヤンマであった。そのためでもないが、標本の保管が悪く、1頭の標本もなくなってしまった。盛夏の夕刻、水田や池のほとりの中空で、おびたしいヤンマが餌食飛翔したが、すべてギンヤンマであったといってよい。この時刻、無数の蚊からなる蚊柱が幾つも立ち上り、ヤンマたちはこの中へ飛び込んで捕食していた。蚊柱は、アカイエカの雄の大群であり、大声で「ワー」と言うと、仲間と間違えて舞い下りて来て顔中にバチバチとぶち当たった。このような大量の蚊が多数のヤンマを養っていたのである。

子供等のトンボ採りの対象も大体がこのギンヤンマであり、雄を「ラ」、雌を「メン」、特に老熟して翅が著しく褐色になったものを「ドロメン」と呼んでいた。また、雌雄の連結飛翔を「ギ」、交尾「ホカケ」と呼んでいた。捕獲した雌の胸部を糸で縛り、時には更に糸の端を短い棒の端に縛り付ける。そして、糸の端または棒をもってぐるぐる回しながら雌を飛ばせて雄を誘い、「ギ」又は「ホカケ」になったところで雄を捕まえる。この間「ラ おーえ」、「ラッぽーえ」、「ヤンマおーえ」、「ヤンバ おーえ」（「おーえ」は「追え」の意味と思われる）など思い思いに声を掛ける。

このような夏の風俗は、この地域からすっかり失せてしまったし、市街化と環境整備の行き届いた現在、もう大阪平野のどこにも見られないであろう。

2 Cordulegasteridae オニヤンマ科

(1) *Anotogaster sieboldii* Selys オニヤンマ

VII. 11. 1946 1♂

VIII. 10. 1949 1♀

素盞鳴神社沿いに流れる武庫川伏流水の水路で採集した。

3 Gomphidae サナエトンボ科

(1) *Siedoldius albardae* Selys コオニヤンマ

VII. 8. 1943 1♀

1頭採集したのみで、これ以外に目撃例もない。たまたま飛来したのではないと思われるが、武庫川の伏流水が流れる水路で多少は発生していたかも知れない。

(2) *Onychogomphus viridicostus* Oguma オナガサナエ

1943 1♀

ラベルを付け替える際、採集月日が記入されてないのに気が付いた。遠い過去のことなので、はっきりした記憶はないが6、7月頃に採集したと思う。この地域で定期的に発生するものではないが、未成熟体であることから、武庫川の伏流水が流れる水路でたまたま発生したのかも知れない。

(3) *Ictinus clavatus* Fabricius ウチワヤンマ

標本は変色しやすく、また破損したので、廃却してしまった。余り多くはなかったが、ハナショウブの古い花茎の先端に特有の姿態で止まっていることがあった。また、8月頃武庫川堤防の背の高い枯草の先によく止まっていた。

4 *Corduriidae* エゾトンボ科

トラフトンボ1頭を採集し、標本にしていたが、破損したため廃却してしまった。5月頃、池の水面近くを徘徊するのが時々見られた。

5 *Macromiidae* ヤマトンボ科

(1) *Epophthalmia elegans* Brauer オオヤマトンボ

IV.9.19491♀

(2) *Macromia amphigena* Selys コヤマトンボ

V.19.19491♀

6 *Libellulidae* トンボ科

標本が残っているのは2種のみ。シオカラトンボ、チョウトンボ、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ、ナツアカネ、アキアカネは普通に見られた。阪神電鉄の武庫川鉄橋付近ではコシアキトンボが見られた。

(1) *Libellula quadrimaculata asahinai* Schmit ヨツボシトンボ

V.21.19481♀

V.17.19501♂

最近では限られたところにしか産しないようだが、当時は平地の池にも少なくなかった。

(2) *Sympetrum baccha matutinum* Ris コノシメトンボ

IX.30.1946

7 *Calopterygidae* カワトンボ科

ハグロトンボ1種のみが、武庫川伏流水の流れる水路で多数発生していた。

8 イトトンボ科、モノサシトンボ科、アオイトトンボ科

幾種類かはいたが、採集品はなく、確かな記録や記憶もない。

シロヘリクチブトカメムシを西宮市内で採集

新 家 勝

Andrallus spinidens Fabricius シロヘリクチブトカメムシ

1990.7.11

西宮市枝川町

余り見掛けないカメムシが電燈に飛んで来たので、持帰って原色昆虫大図鑑（北隆館）で調べたところ、本邦での分布は南九州までとのこと。びっくりすると同時に図鑑は昭和48年版なので、既に近畿での採集記録があるかと思い、高橋寿郎氏にお尋ねした。氏がいろいろと文献を調べられたところ、1987. 8. 17 倉敷市鴨ヶ辻山の記録はあるが、兵庫県下では未記録であろうとのことなので、報告させていただくことにした

採集場所の西宮市枝川町は、浜甲子園の海岸べりで、付近には甲子園フェリーボートの発着場があり、今津港も遠くないところにあるので、船について来たものが採集されたという可能性がある。一方、神戸ポートアイランドにカメムシがよく集まるように、このあたりも移動するカメムシが通過したり、滞留したりしやすい場所かも知れない。

終りに、ご多忙中のところ本種について多くの文献をお調べいただき、いろいろとご教示いただきました高橋寿郎氏に厚くお礼を申し上げます。

（付記）上記倉敷からの記録は“すずむし、No.124:29,1990”に依る。新家 勝氏の記録は兵庫家初記録になると考えられる。四国からの記録も無かったが石田明儀氏は高知県から記録され(Rostria, No.35:438-439,1983)、本年9月12日送って来られた“げんせい(56):17-24,1990”には川沢哲夫氏はか四氏共著の“四国におけるクチブトカメムシ類の記録”が発表になりその中で本種は高知県では平地の畑や水田から発見されるとして多くの採集例を示され愛媛県の記録も含まれている。また広島

県八本松町原で水田から林 英明氏が1♀(25.VII.1984)採集していると記録されている。即ち本州の兵庫・岡山・広島県に分布している種ようである。

(高橋)

阪神間でのカミキリ 2 種の採集記録

新 家 勝

相当古い記録であるが、一方は白いカミキリ、もう一方は飛べないカミキリとして注目され、いずれも個体数が余り多くない種であるので、筆者の標本からデータを報告させていただく。

- (1) *Olenecamptus formosanus* Pic タカサゴシロカミキリ

1946.7.9 芦屋市西芦屋町

級友の寺條 勝君が、「きれいなカミキリを採ったのであげる」といつてくれたもの。

- (2) *Parechthistatus gibber* Bates ヒメコブヤハズカミキリ

1974.9.23 西宮市鷺林寺町

筆者の兄新家正俊が散策中に見つけ、変わったカミキリであったので、くれたもの。

ホソオチョウ、神戸市東灘区で採集される

三 宅 隆 三

1990年8月25・26日、神戸生物クラブによる「植物・昆虫・海藻・貝・岩石などの作品鑑定会」が、神戸大丸百貨店東隣の日毛ビル6階ホールで催された。2日目(26日)にホソオチョウ *Sericinus montela koreana* Fixsen が持ち込まれた。関西地方では、はじめての記録ではないかと思われるので報告する。

採集者 倉橋英士（8才、神戸市立本山南小学校3年生）

採集地 神戸市東灘区本山南町3丁目（そえだモータープール）

採集日 1990年4月22日（日）

採集した時の様子

そのモータープールは、（彼の）自宅のすぐ傍で、周囲の草むらにいろいろな虫がやってくる。この日、変なチョウがいるなと思って、素手で捕らえた。見たことのないチョウだったので、翌日は兄の正剛君（14才、神戸市立本山南中学2年生）と連れ立って捜しに言ったが、一匹も見つけられなかった。

この日の鑑定会では、大倉正文（日本甲虫学会）・森和夫（同）両氏も鑑定（同定）・指導に当たっておられたが、「誰かの飼育品が逃げたか、誰かが放したのだろう。放したとすれば、環境条件としては住宅街であり、必ずしも好適地ではない。もう少し北に上がれば六甲山の麓になり、食草となるウマノズクサもそこそこある。そこに運んで、放すだろう。だから、これは、逃げ出した個体の可能性が強い」との結論に至ったが、その確証は何も無い。予断や偏見があってはいけないだけに、今後の採集・目撃情報が待たれる。

兵庫県産珍稀な3種のクビボソハムシの記録

（兵庫県甲虫相資料・239）

高橋寿郎

○ アワクビボソハムシ神戸市内で採集

アワクビボソハムシ *Oulema dilutipes* (Fairmaire) は中国北京産で *Lema* 属で記載された種である (Rev. d'Ent. VII, p.149, 1888).

本種が日本に産すと初めて記録されたのは中條道夫・木元新作両博士により *Hapsidolem* 属として記録された (Niponius, Takamatsu, Vol. 1, No.4:3, 1960). そしてその記録に用いられた標

本中に山本義丸氏が採集された氷上郡柏原産がふくまれていた。即ち兵庫県からも日本で初めての記録と同じく記録されたことになる。氷上郡からは柏原以外山本義丸氏によって遠阪村が記録されている(1953, 1958)。最近磯野昌弘氏は美方郡浜坂町味原から本種を記録された(この記録は朽木中より採集と大変興味深い記録である)(IRATSUME, No.8/9, p.85, 1985)。兵庫県下での本種の記録はと言うと以上のものを知るだけであった。県下では可成り珍しいハムシの1種ではないかと考えられる。

1988年9月28日神戸市西区伊川谷前開の休耕田の草叢をカメムシ類採集の目的でスーピングをやっていたところ *lex.* が網に入った。直ちにこの種らしいとわかったもので可成りの時間付近を丹念にスーピングしたのであるがそれ以外全く採集出来なかった。時期的に若干遅かったのかもしれないがとにかく市内でこの様な種に会えたことは大変うれしくもっと調べたら案外あちらこちらにいる種なのかも知れない。

食草はアワ、モロコシ、エノコログサと言われている(10月4日も再度採集地点を訪れることが出来たので約1時間程スーピングをして見たがやはり2頭目を見付けることは出来なかった。

○ トゲアシクビボソハムシ加東郡東条町森で採集

トゲアシクビボソハムシ *Lema coronata* Baly は“Nagasaki, on the Chrysanthemum”産で記載された種である(Trans. ent. Soc. London, 1873:72)。

桑山 覺博士は Kumamoto, Mizoro-Ike Prov. Yamashiro, Fukuoka を産地として報告された(Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. Jour. 33(1):70, 1932)(本州からの初めて記録になると思われる。)中條道夫博士は本州から *isp.* Tokusa (Honsyu) 10-VI-1922 (Col. T. Shiraki) を記録された(Sylvia, Vol. 4, No. 1, p.19-20), その後中根猛彦博士は日向高鍋産1♂の異常型(3-5. VII. 1945) *ab. takanabensis* Nakane を記載された(昆虫学評論 Vol. 5, No. 1, p. 53-54, pl. 3, f. 1, 1950)。

中條道夫・木元新作両博士は1960年に桑山博士が記載されていた *L. formosana* を *L. coronata* の *forma* とすると同時に *ab. takanabensis* もこの *forma* であるとされ分布は台湾、日本(九州)とされた(Niponius, Vol. 1, No. 4, p. 3)。さらに木元博士は1961年に佐賀から記録された *L. sagaensis* Heinze が *L. coronata* のシノニムと発表された(Kontyu, Vol. 29, No. 3, p. 162)。1964年には *L. formosana* を本種の亜種とされた(Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ. Vol. 13, No. 1, p. 126, 1964)。

大野正男教授はそれ迄の知見をまとめて *formosana* を *coronata* の *forma* と扱うとされている

(昆虫と自然 Vol. 2, No. 3, p. 17, 1967)、一番新しい木元博士の検索によると本種の分布は本州、四国、九州、琉球、中国、台湾となっている(昆虫と自然 Vol. 22, No. 2, p. 26, 1987)。

図説は後藤光男氏(1955)、中根博士(1963)、木元博士(1984)とあり生態については高倉康男氏の報文がある(新昆虫 Vol. 4, No. 7, pp. 17-19, 1953)

こうして見てくると分布も割合広いし図説もされていて意外と普通にいる種なのかもしれないが筆者が見ている範囲では記録はそれ程目につかない。

ところで兵庫県下での本種の分布はとながめて見ると(残念ながら筆者県下では未採集)本種を兵庫県下から一番始めに記録されたのは故後藤光男氏の様で宝塚市内(IV-1950)からの記録でこの標本は保育社の原色日本昆虫図鑑(上)甲虫編(1955)の中にカラーで紹介されている。氏は“5~7月頃出現するがすくない”と記しておられる。

次いで山本義丸氏が氷上郡から記録された(1985)がデータが無い。高橋 匡氏は出石郡出石町水上(19-VII-1063)から記録された(1963)。大野正男教授は津名郡愛宕山から3exs. 採集(7-V-1960)記録された(1969)。また森 和夫氏は神戸市の藍那から2exs. (7-VII-1985)を採集記録された(1986)。

以上が今迄の県下で記録された総てではないだろうかと思われる。やはり記録が意外と少なく県下では個体数の少ない種なのではないかと思われる。蜂谷幸雄氏は加東郡東条町森の池畔で 1ex. を採集され(18-V-1984)その標本を御恵与下さった。県下の新しい産地として記録しておきたい。やはりもう少し詳しく各地を調べて見なくてはいけないと考えている。食草はツユクサと知られている。標本を御恵与下さった蜂谷幸雄氏に厚く御礼を申しあげる。尚三木中学校生物部採集報告書(1989)に記録されている三木産の本種の記録は本誌 Vol. 18, No. 1 (p.15)に記したようにキバラルリクビボソハムシと云うことになる。

○ キベリクビボソハムシ 龍野市で採集

キベリクビボソハムシ *Lema adamsii* Baly は大変美しいクビボソハムシである。

中国 Chusan 産標本(A. Adams が僅か1頭採集)に基いて Baly が記載された種である(Ann. Mag. Nat. Hist., (3)XVI. pp.155-156, 1865)。

日本からの記録は同じく Baly による長崎が始めてのようである(Trans. Ent. Soc. London, p.75, 1893)。

本州からの記録としては桑山 覺博士のものが始めてであろうと思われる。但しこの記録は本州の何処であると云う産地は記録されていない。またキベリクビボソハムシなる和名もこの桑山博士に

よるものであろうと考えられる (Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. Vol. 33, pt. 1, p.77-78, 1932).

現在分布は本州、伊豆諸島、隠岐、四国、九州、対島、種子島、朝鮮半島、中国となって分布は広い。本州では東京あたりが分布の東北限になっているようであるとされている (大野正男、昆虫と自然 Vol. 2, No.13, p.16, 1967)。

大野氏によると比較的珍しい種であるため一度に多数とれることが少ないとも述べておられる。

斑紋が色々に変化するようでこの点に就いては中條道夫博士の詳しい報文がある (新昆虫 Vol. 7, No. 12, p.4-6, 1954)。

兵庫県下からの記録も大変少ない。筆者自信は宍粟郡音水で1頭採集しているだけであった。1988年6月13日龍野市神岡町の池畔を飛んでいる1頭を採集することが出来たので此処に報告しておきたい。付近を詳しく捜して見たがヤマイモハムシ *L.honorata* Baly が3頭採集出来ただけでとうとう本種はこの1頭以外採集出来なかった。食草はヤマイモ、オニドコロなどが知られている。この結果県下の本種の記録地点は次の様になる。

龍野市神岡町 (lex., 13-VI-1988). 神崎郡大河内町川上 [木元, 日浦, 1971]. 宍粟郡音水 (lex., 21-VI-1972). 水上郡神楽町稻土 [山本, 1953, 1958]. 出石郡出石町林木 [高橋, 1963].

また県下では珍しい種と考えられていたジユシホシクビナガハムシ *Crioceris quatuordecimpunctata* (Scopoli) (従来からの県下の記録は磯野氏による美方郡浜坂、城山だけであった, 1979, 1985) が最近城崎郡竹野町のアスパラガス栽培地に多数見られるという報告をしておられる (IRATSUME No. 13・14, p.52, 1990). 新聞報道によると神崎郡大河内町犬見川流域にもアスパラガスの栽培が盛んで今年あたりから京阪神地方にも多く出荷出来るようになったとのこと大変申し訳ないがこのハムシこの地域でも見られるのではないだろうか。竹野町から報告された本庄四郎氏も言及されておられるように日高町の神鍋高原温泉町の畑ヶ平高原の高原野菜としてのアスパラ生産地にも恐らく見られるのではないかと考えられる。

キイオオトラフコガネ兵庫県に産す

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 4 2)

高 橋 寿 郎

最近三宅義一氏は紀伊半島産と九州中・南部産のオオトラフコガネを従来のオオトラフコガネから別けて新名を与えられた(北九州の昆虫 Vol. 37, No.1, pp.27-32, pl.4, 1990). 兵庫県に産するオオトラフコガネは基本的な *Paratrichius doenitzi* に当るのかと調べて見た。

この種は兵庫県では瀬戸内海に面した地域、六甲山系などでは今の所見つかっておらず県の中央部から北宍粟郡音水、赤西、養父郡氷の山、美方郡扇の山あたりには割合多く産するようで筆者の手許にも宍粟郡音水産 2♂、2♀、養父郡氷の山産15♂、10♀の標本がある。そこでその内の数♂の交尾器を調べて見た所この交尾器は今回三宅義一が *P. itoi* Tagawa キイオオトラフコガネとして図示された交尾器にはほぼ一致する。筆者所有群馬県産♂は三宅氏の *P. doenitzi* に一致した。手許にある和歌山県護国寺山1♂、奈良県大台ヶ原産1♂の標本の♂交尾器も兵庫県産とはほぼ同じ様であった。従って兵庫県にて採集しているのはキイオオトラフコガネと同定すべきかと思うが後脛節の刺は強く曲り90度で三宅氏の図より強く曲っている。♀交尾器はよく調べていないがこの類を可成り前から詳しく調べておられ色々の資料等を御送りいただいている香川県の佐野信雄氏によると兵庫県のものは岡山、滋賀、福井、三重に分布している型で中国地方(広島、岡山)、和歌山、奈良に分布している型とやや差異があるようになっている。もっと数多くの産地の標本を調べて見ないと良くわからないが少なくとも兵庫県産のオオトラフコガネは *P. doenitzi* では無いようで一応キイオオトラフコガネ *P. itoi* としておくがそれで良いのかどうか紀伊半島から兵庫県の中・北部に致る間での各地標本とか中国山脈の標本をもっと集めて見てみないといけない様に思われる。参考のため筆者所有兵庫県産標本のデータを次にしておく。

兵庫県宍粟郡音水 2♂, 13-VII-1958, 1♀, 20-VII-1969, 1♀, 15-VII-1973, 養父郡氷の山, 1♂, 22-VII-1954, Y. Yamamoto leg., 5♂, 3♀, 27-VII-1956, 6♂, 6♀, 21-VII-1958, 3♂, 1♀, 26-VII-1959 (山本義丸氏採集標本以外全部筆者採集)。

キベリハムシ、西宮市にも生息

三宅隆三

1990年8月25日、近藤浩文（西宮自然保護協会副会長）氏から、「苦楽園で、1週間ほど前にキベリハムシと思われる昆虫を見た」との知らせを受けた。早速、描いていただいた現地案内図を手掛かりに出かけたところ、間違いないことを確認した。本誌主宰の高橋寿郎氏にお尋ねしたところ、「西宮市内での生息の記録はなさそう」とのことなので報告する。

生息地 兵庫県西宮市苦楽園五番町2

この辺りは、西宮市内屈指の大邸宅が並ぶ住宅街である。道路に面して張られた金網にビナンカズラが10数mほどに渡って絡み着いている。25日は、4個体を見つけることができた。現地に着いたのが午後6時を少し過ぎていたので写真撮影はしなかった。ストロボを持ち合わせなかったからである。また、筆者宅から近いこともあり、この日は採集もせず、翌26日、午前8時30分頃に再び現地に出かけた。この時は、5個体1死体を数えることができた。写真撮影をした後、1個体を採集し、標本にして保存した。

なお、この件を西宮自然保護協会の理事会で話したところ、小林律子理事から、昨年7月22日に西宮市役所環境保全課が行なった「水辺ウォッチング」の際に、西宮市仁川町6丁目7辺りの仁川河川敷内で1個体を捕らえたことがあるとの報告があった。あまりにも有名な昆虫なので、すでに記録はされているものと思い、参加者に見せた後、放したとのことである。併せて報告しておく。

（附記） 本稿を送って頂いたのが9月6日である。9月11日に送られて来た兵庫県立自然系博物館（仮称）準備室ニュースNo.3を拝見すると西宮市塩瀬町名塩字土林にてキベリハムシを採集した記録（1989・7・20）が発表になっていた。西宮市の記録はこちらの方が古い記録になると思われる（高橋）

北ベトナム産のキベリハムシ

高橋 寿郎

御承知の通りキベリハムシ *Oides bowringii* (Baly, 1863) はホンコン原産で中国大陸の長江以南の地域には割合広く分布しているようであるが朝鮮とか台湾にいるのかどうか今の所よくわからない。最近の木元新作博士の論文 “*Chrysomelidae (Coleoptera) of Thailand, Cambodia, Laos and Vietnam. V. Galerucinae*” (Esakia, No. 27, 1989) を拝見するとトンキン産で報告されている *Oides elegans* Laboissière, 1919, *Oides tonkinensis* Laboissière, 1929 が共に *Oides bowringii* (Baly, 1863) のシノニムになっておりキベリハムシはベトナムにも分布していることになっている。木元博士の論文ではベトナムでの具体的な産地は示されていない。

日本のキベリハムシは♀の單為生殖であるが中国大陸のキベリハには♂もいるとのことであるので(木元博士の御教示による) 何んとかこの方面のキベリハムシが入手出来たらなァと常々考えていた。

本年は日本人による北ベトナムでの採集が何人かの手によって実施されたことは二・三の情報で知っていた(例えば月刊むし No.233, 編集後記, 1990. その他)。

たまたま東京のF社から北ベトナムで採集したハムシのセットを別けるとの連絡を受けた。若しやと思ひ1セット注文して送って貰ったところ送られて来た20種30頭の北ベトナムハムシのセットの中に何んと1頭のキベリハムシが入っていた。思わずやっ海外のキベリハムシにお目にかかれたと喜んで居る。そこでF社へ電話をしてこのセットが残っているかどうかベトナムのキベリハムシが手元にないかと問合せた所今1セットが残っていると云って送ってくれた。こちらにもキベリハムシが2頭入っていた。結局3頭の北ベトナム産のキベリハムシが手に入ったわけである。3頭とも産地は TAMDAO, Vietnam 3~7・VII・1990となっている。筆者の所有している地図で搜して見たが余り良い地図でないのか(平凡社・世界大地図帳、1985) この場所がはっきりとわからなかった。この北ベトナム産のキベリハムシと神戸産の標本を比較すると次のようにはっきりとした違いがある。即ち神戸産のものは触角が黄褐色で末端の4節即ち8, 9, 10, 11節は黒色(第8節は第7節に近い部分が僅に黄褐色であるがほとんど黒色に近い)、ベトナム産のものは第8節は黄褐色部が多く黒色は先の方に僅かある或は半分位黒色と云う具合である)。また上翅会合線に沿って神戸産のものは黄褐色で縁取られている。即ち左右上翅は青藍色を黄褐色の縁取りで完全につつんでいるのであるがベトナム産のものは会合線にそって黄褐色部が全く無い。即ち各上翅は三方が縁取られ会合線部分は青藍色であると云う大きな違いがある。従って見た目にはベトナムのキベリハムシの方が神戸産より黒っ

ぼく見える。

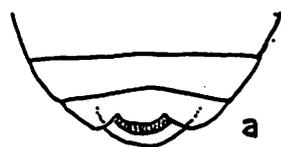
但し3頭だけの結果であるから或は完全に黄褐色に縁取られているものがあるのかもしれない。

そこでこの3頭と神戸産のキベリハムシとの腹部末端部を比較して見るとあきらかに神戸産とちがうのが2頭ある。そこでその内の1頭の交尾器を調べたところやはり交尾器はあった。即ち♂が2頭いたわけである。一応♂♀の腹部の図と♂交尾器を図示しておく。神戸産のものは標本が古くなると腹部が小さくなってしまって末端部が良くわからないものが多い。之は産卵後のものがこうなるのかもしれない。従って新しい標本でないとならば腹部末端部は良くわからない。一応今回調べたものはベトナム産も合わせて1990年採集のものである。

♂♀の違いは腹部末端部以外 S. Maulik は *Oides* 属の特徴として前・中肢跗節の第一節は後肢跗節の第一節より拡がっていると云う特徴が種によってある様にかいてあるが (Fauna British India, Chrysomelidae, Galerucinae, P. 100, 1936), この特徴は余りはっきりとしない様でやはり腹節の目に見える最終節の形態がはっきりしている様である (即ち図の様に♂のそれは両側が斜に強く切れ込んでいる)。

何はともあれキベリハムシの♂を始めて見たので非常にうれしく此処で紹介した次第である。尚体長は余り違わないが♂はやや小さい感じがする。原産地ホンコン産 (タイプ標本も含めて) とか南中国の標本をもっと見なくては何ともいえないが日本産のものは大陸産のものと同様に上翅が完全に黄褐色に縁取られていると云った明瞭な相違があるのかもしれない (ベトナム産はやや紫色がかかった色彩もしている)。

(兵庫県甲虫相資料・243)



キベリハムシ

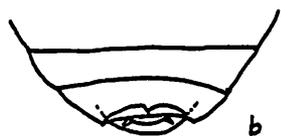
生殖節の外部形態

a. 雄

TAMDAD

VIETNAM

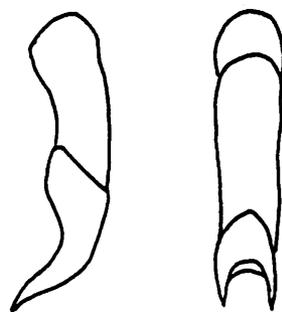
3~7・7・1990



b. 雌

神戸市鳥原産

9・8・1990



キベリハムシ雄交尾器

側面

背面

TAMDAO-VIETNAM

3~7・7・1990

オオツノトンボ神崎町で採集

森田真澄

神崎町へは足を運ぶ機会が多いが、オオツノトンボ *Protidricerus japonicus* MAC LACHLAN は今回初めて見かけた。町内ではツノトンボは多いが、オオツノトンボは少ないと思えるから分布資料として報告する。

lex., 神崎郡神崎町貝野 (標高150m)、28-Ⅳ-1990 燈火下の死骸。

笠形山のシテムシ4種

森田真澄

笠形山でのシテムシ類の記録はあまりないと思われるので筆者採集の4種を報告する。採集地点は笠形山北麓 (神崎町側)。すべて地上を歩行していた。

- マエモンシテムシ *Nicrophorus maculifrons* KRAATZ 8-VI-1989 lex.
- ヨツボシモンシテムシ *Nicrophorus quadripunctatus* KRAATZ 29-X-1987 lex.
- オオヒラタンテムシ *Eusilpha japonica* (MOTSCHULSKY) 30-VIII-1990 1 ♀
- ベッコウヒラタンテムシ *Eusilpha brunneicollis* (KRAATZ) 24-VIII-1990 1 ♀

ニシキキンカメムシをめぐりて (其の二)

高橋 寿郎

前回拙文にて新家 勝氏が西宮の尼子谷・夫婦岩にて採集したものがニシキキンカメムシの幼虫ではないかとカラーによる図をつけて送られて来たことを報告した。図の感じからニシキキンカメムシらしいむね報告しておいたがその後新家氏御自身御息が持って帰られた“森と海と清流の仲間たち”(高知県刊)の中に出ているアサスジキンカメムシの幼虫とは全く違うことからニシキキンカメムシだろうと考えられるとその頁の所とニシキキンカメムシの出ている所をコピーして送って来られた。そして新成虫は5-6月頃に現れるとのことだからその頃尼子谷へ行って見るとお手紙を戴いた。その後5月13日に1度行って見たがそのあたり幼虫を採集した当時と様相が全く変わってしまっており夫婦岩も無くなっていると付近の地図までそえて御送り頂いた。

筆者は本年家庭的事情でフィールドに出るのに制限を受けこの尼子谷への調査は今の所出来ていない何んとか調べたいと気にはかかっているがそのままになっている。

前回の拙文最後に“げんせい”第52、53号誌上にこのニシキキンカメムシの報文があることをかいておいたがもう少し詳しく紹介して見る。第52号の表紙は竹東 正氏による美事なカラーによる本種の図説で飾られ P.17-18 に同じく竹東氏の“ニシキキンカメムシの高知県からの初記録とその飼育”が発表になっている。そして第53号には川沢 哲夫・川村 満・高井 幹夫氏共著になる“四国のキンカメムシ亜科 Scutellerinae カメムシの記録”が発表してあり (P.13-18) p.18に一面カラーで四国のキンカメムシ類が示されている。その中でニシキキンカメムシの幼虫がカラーである。これを見ると新家氏がかいて送って下さった幼虫は正しくニシキキンカメムシであることがはっきりする。

四国でカメムシ類を研究しておられる川沢 哲夫氏が仕事の関係で西宮市に単身赴任と云うことでアパート暮らしをしておられるから一度連絡をとって見たらと高知昆虫研究会の事務局の吉永 清夫氏から御教示頂いたので厚顔にも川沢氏にお手紙を差し上げた。折返し川沢氏から論文別刷(カメムシに関しての)とお手紙更には電話を頂いて四国のニシキキンカメムシの情報もお教え頂いた。その上九州の古処山で終令幼虫を採集しそれから産卵飼育して得た標本であると云って2♂1♀をわざわざ送って下さった。生れて始めて手にすることが出来たニシキキンカメムシ美しい恐らく生時はもっと素晴らしいであろうと毎日眺めている(四国での記録は徳島県神山町野間と云うのがあるが若干古い記録で今回の高知県南国市昆沙門滝付近の庭園樹に150頭近く見つかったものであると)。

尚前回の拙文を読まれて奥谷 禎一博士からは静岡県下でツゲに大発生して殺虫剤散布が行われた

どの御教示を頂いた。同様のことが竹東 正氏の報文(1987)にもある。即ち“長谷川 仁氏からニシキキンカメムシがツゲの栽培地では被害のため薬剤散布をしているとの情報を頂いた”とある(P. 18)。どうもこのカメムシ ツゲに被害を与えている様で案外という所には多くいる種のようにである。

余談ではあるが始めに一寸紹介して新家 勝氏がわざわざコピーして送って下さった“森と海と清流の仲間たち”その後“日本の生物”7月号(Vol. 4, No.7, 1990)誌上に紹介があったものだから早速高知県国民休暇局自然保護課へ手紙を出して一冊領けて貰えないかと依頼した所自然保護課の橋本氏から既に本書は領布が終了してしまっておりまた販売はしていないのだが何か役に立つのであれば一冊贈呈するから利用して欲しいと云って送って頂いた。なかなか良い本で土佐の自然ガイドと云ったサブタイトルがついて160p. 全頁カラー印刷で昆虫に就いての写真による紹介が多く土佐を代表する虫たちの姿が美しく大変有益な文献である。わざわざ送って下さった橋本氏の御好意に厚く御礼を申しあげなくてはいけない。

ニシキキンカメムシは兵庫県下には棲息していることは間違いなく再確認を是非したいものだと思います。い乍らサッパリ成果があがっていない。会員の皆様方にも是非注意して頂きたいものである。

とりとめの無いことを書いたが“ニシキキンカメムシをめぐる(其の二)”と題してその後の気づいたことをとりまとめておいた。

(追記)最近(X・1990)広島の中村慎吾博士が“帝釈峡昆虫紀(九)ニシキキンカメムシとカメムシの民俗”と云うのを発表になり(帝釈文化 20号:3—10,1990)その別刷を御恵送頂いた。色々カメムシに関しての有益な解説があり大変参考になる報文である。ただニシキキンカメムシの分布の中に兵庫県が抜けている。兵庫県の記録文献を御存知無いのだと思はれる。

県関係文献紹介

○ 兵庫県生物学会但馬支部 但馬の自然 (のじぎく文庫)

のじぎく文庫平成元年度配本の一冊と云う形式で出版(1990年4月刊)されたものである(一般書店で1,300円で販売されている)。執筆者は26名で兵庫県生物学会但馬支部のメンバーを主体に但馬むしの会々員の方やその他の方も加わっている。全体のまとめは高橋 匡氏が中心になっているようだ。昆虫関係はチョウの木下賢司氏、トンボ(上田尚志・山崎喜彦氏)甲虫類・セミ・カメムシ類は共に上田尚志氏、アリは滝本恒夫氏(日本蟻類研究会)、水生昆虫は西村 登博士と仲々

当を得た方々が分担しておられる。高橋 匡氏は全体のまとめ以外但馬の自然探訪案内の所で登山として健筆をふるっておられる。全体を五章に別けてまとめられ登山・ハイキングガイド・滝めぐり、温泉めぐり、海岸めぐりの案内なども取められている。昆虫専門の書でもないので概略の説明といった所。一般の方を対象としてはわかりやすくまとめられていると思う。

○ 伊丹の自然 第8号 (1990年3月)

従来本誌は会宛に御送り頂いていたのであるが担当の方が変わった関係からか第7号より送って貰ってない。この度当会々員新家 勝氏が“武庫川の昆虫目録”を発表されてその第8号を御恵送頂いたので此処に紹介しておく。長年にわたる氏の武庫川(宝塚以南)で見られる昆虫をリストアップされ要領よくまとめられたものである。この川の流域も刻々と変化が進んでいる様なのでこのような記録を発表しておかれることは大変価値があると考えられる。

昆虫に関しては他に報文が見られない。この貴重な文献を御恵送下さった新家 勝氏に御礼を申しあげる。

○ 竹崎雅丹：神戸の小さな生き物たち

市民のグラフ こうべ No.213:2-19(1990.7)

昆虫のみならず小鳥、魚その他をふくむ神戸市内での生き物を写真で解説。昆虫ではコオイムシ、オオムラサキ、ゲンジボタル、キベリハムシなどが紹介されている。楽しい読物である(神戸市広報課発行 一部200円)

○ 兵庫陸水生物 No.36. 37.

兵庫陸水生物研究会10周年記念号 (1990.8)

兵庫陸水生物研究会が設立されたのが1981年1月である。本年度で10年になることから10周年記念号が出版された。190頁にわたる大冊で多くの有益な報文が発表になっている。ただ陸水生物であるから昆虫ばかりで無いことは勿論である。この様な立派な記念号を出版された御努力に改めて敬意を表したいと思う(紹介者も2篇発表して頂いている)。

(T)

“キベリハムシに関する文献目録”

高橋寿郎編著 1990年8月刊。B5、タイプオフ 16頁 ¥500 (送料共)

兵庫県を代表する昆虫の一種としてキベリハムシは良く知られています。この度このキベリハムシに関する文献目録をまとめてみました。個々の文献にいくらかの解説を入れて読物として充実するよ
うにいたしました。

本来ならば会員の皆様には進呈しなくてはいけないのですが何分にも赤字経営の会財政の上にこの
目録の印刷代もかかりましたし送料もかかります。誠に勝手ですが一部500円(送料込)でお買上げ
頂き印刷代の一部に充当させて頂きたく思いますので宜敷しくお願い致します。一部でも多くお買上
げ頂ければ助かります(会費と一緒に御送金頂いて結構です)

“キベリハムシに関する文献目録” 追加文献

8月に刊行致しました上記目録、印刷終了後次の文献が脱落しているのに気がつきました。大変不
細工な次第ですが此処に追加させていただきます。

奥谷禎一 (1974) 兵庫県の昆虫類

兵庫県の自然の現状Ⅱ:58, 67.

(兵庫県生活部自然課)

その時点までのキベリハムシの県下の分布の概略と分布図がついている。

学会誌・機関誌・連絡誌

(1990・Ⅲ～1990・Ⅳ)

Parnassius (淡路昆虫同好会々誌)

- No.36 (1990・Ⅳ)
 Insecta (淡路昆虫同好会連絡誌)
- No.35 (1990・Ⅳ)
 のせ (大阪昆虫同好会連絡誌)
- Vol. 19, No. 1～8 (1990・Ⅰ～Ⅷ)
 Crude (大阪昆虫同好会々誌)
- No.33 (1990・Ⅶ)
 IRATSUME (但馬むしの会々誌)
- No.13/14 (1990・Ⅴ)
 昆虫ずかん (但馬むしの会連絡誌)
- No.25(1990・Ⅴ)
 自然とともに (兵庫県保健環境部環境管理課)
- 第10号 (1990・Ⅱ)、第11号 (1990・Ⅷ)
 Awajiensis (淡路ネイチャーアソシエーション)
- 02 (1990・Ⅲ)
 N/K通信 (淡路ネイチャーアソシエーション)
- 05 (1990・Ⅴ) 06 (1990・Ⅶ)
 兵庫県立自然系博物館 (仮称) 準備室ニュース
- No.3 (1990・Ⅷ)

<追加・訂正>

前 Vol. 18, No.1 “尼崎西南部の昆虫 (2)” の中で次の様に訂正並びに追加があります。

訂正	誤	正
----	---	---

P.6. 上から4行目	甘橋	甘橋類
-------------	----	-----

P.9. 上から15行目	アツカレハ	マツカレハ
--------------	-------	-------

IX・19・1949

追 加

P.9. 上から9行目	チヤドクガ	17・Ⅶ・1946
-------------	-------	-----------

会費納入についてお願い

1991年度会費 2,500円

出費多端の折、恐縮に存じますが会費を年内に同封振替用紙御利用の上お願い申し上げます。

交 換 誌

(X ・ 1989 - IX ・ 1990)

(いずれも本部に保管しております)

神奈川自然誌資料 11 (神奈川県立博物館 Mar. 1990)

るりぼし (水戸昆虫研究会々誌)

14 (Mar. 1990)

越 虫 (越中むしの会連絡誌)

No.20 (IX・1989)、No.21 (II・1990)

すかしば (山陰むしの会々誌)

No.32 (X II・1989)、No.33 (IV・1990)

富山市科学文化センター研究報告

第13号 (V・1990)

編 集 後 記

- 本年は猛暑の夏だったと思います。虫の出現も平年と違っていたような面が見られましたがいかがでしたか。
- 本号はお陰さまで貴重な記録の発表が多くあります。御投稿下さった皆サンに厚く御礼申しあげ

ます。また本年は神戸市内と氷上郡の2ヶ所で調査採集の機会に恵れまして新知見も得喜んでいま
す。

- インセクタリウムの Vol. 27, No.7 “昆虫と私” 欄で大沢省三博士が“昆虫採集雑感”を書
いておられる。真に同感です。“昆虫採集を否定する風潮”がマスコミ、教育界にあることは悲し
い次第で冷静にものごとを考へてほしいものだと思います。
- 本年“文芸春秋”7、8月にソ連科学アカデミー付属東洋学研究所国際協力部長アルクセイ・キ
リチェンコとの対談“日本人よ我々は自己批判するあの参戦・抑留！ 非はわがソ連にあり”とす
る文が発表になりました。真疑の程はわかりませんが編集子のような当事者としては何を今更と云
う気持ちです。青春時代を“お国のために”と苦しい生活を強いられて来た者には現状の日本はこ
のままでいいのかと暗澹たる気持ちです。こんなことは老人の世迷い言にすぎないのでしょうか？
- 相変らずの原稿難・資金難。来年度分の会ヒも宜敷しく。また“キベリハムシに関する文献目録”
の方も合せましてお願い致します。

Vol. 19, No.1 は来年5月出版を目指します。

(T)

きべりはむし 第18巻第2号

1990年11月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：(株) 文 尚 堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
